

| | |
|------------------|---|
| Title | 表紙 目次 |
| Sub Title | |
| Author | |
| Publisher | 慶應義塾経済学会 |
| Publication year | 1956 |
| Jtitle | 三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.49, No.10 (1956. 10) |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | |
| Genre | |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19561001--001 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

三田學會雜誌

慶應義塾經濟學會

十月號

經濟學關係文獻目錄
書評及び紹介

| | |
|-----------------------------|------------|
| 現代財政學に關する若干の疑問 ——一つの覺書—— | 高木壽 (一一) |
| 勞働供給に關する覺書 | 辻村江太郎 (一五) |
| 『保險と價值形成の問題』について | 庭田範秋 (一七) |
| 所得税と消費税の厚生效果 | 古田精司 (一八) |

論說

第四十九卷

第十號

昭和二十六年十月二十四日第三種郵便物認可第一九〇三號

MITA GAKKAI ZASSHI

(Mita Journal of Economics)

Vol. 49, No. 9

September, 1956

CONTENTS

| | |
|---|---|
| Historical Development of Industrial Relations and Their Specific Character in Japan | Page <i>K. Fujibayashi</i> (1) |
| On the Historical Character of Economic Theory | <i>S. Tomita</i> (12) |
| The Theory of American Labor Union | <i>H. Kawada</i> (25) |
| —On Commons' Theory— | |
| L. Stein—His Idea of State and Public Finance | <i>M. Oshima</i> (38) |
| "Brevium Exempla-miscellanea" | <i>H. Uono</i> (50) |
| Survey of Academic Circles | |
| Reviews and Notes | |

Published for

KEIO-GIJUKU KEIZAI GAKKAI

(The Keio Economic Society)

Editorial communications to be sent to
the Editor, Keio-Gijuku Keizai Gakkai.

Keio-Gijuku University,
Mita, Minato-ku, Tokyo, Japan.

Price 70 yen

書評及び紹介

J・A・C・ブラウン著『産業の社會心理』……………中 鉢 正 美(六〇)
 — 工場における人間關係 —
 M・サコフ『社會主義の經濟的カテゴリーとしての原價』……………加 藤 寛(六三)
 經濟史發展の現段階……………渡 邊 國 廣(六四)
 物價史の研究について……………渡 邊 國 廣(六六)

現代財政學に關する若干の疑問

— 一つの覺書 —

高 木 壽 一

は し が き

財政學の研究を進めて行くに當つて、たとえ一般に承認されていることであつても、私には承服し得ないいくつかの疑問がある。それは初歩的な問題であつてまた基本的な問題であることもある。ここに、かねて私が持つていくつかの疑問を提示する。それらがすべて、とるに足らない疑問であるか。或は考慮を拂うに足る疑問であるか。讀者の創造的批判を得たいと思つて、卒直に私の疑問を披瀝する。本論の一部は他の機會に發表したものもあるが、本誌の讀者殊に經濟學部の學生諸君のうちには讀んでいない人々も多いと思ふので若干書き改めてここに發表する。

一、貨幣のない社會には財政現象は存在し得ないか

財政または財政活動といふことは、古くから、何等かの形態の國家公共體の貨幣(または資金)の調達と運用に關することであると理解されている。財政活動を行うのは國家公共體の政府である。財

現代財政學に關する若干の疑問

政活動の主體—財政主體は政府であるが、その財政活動は政府の money-raising と money-spending の活動であると理解されていることが多い。財政または財政活動は、過去および現在に於ける經驗的事實として、貨幣(または資金)の調達および運用(使用)の形態をとつてゐる。財政活動は一般に經驗的事實として貨幣と結びつてゐる。しかし、貨幣のない社會に於ては財政活動は行われ得ないか。貨幣のない社會には財政現象は存在し得ないか。

先頃、宇佐美誠次郎・谷山治雄兩氏の共編・共譯の『現代財政論』が刊行されたが、その書には十三編の興味深いまた示唆に富む論文が収録されている。殊に私が興味を感じたのは、デイヤチェンコの「ソヴェト財政の本質と機能」と、アラハベルジャンの「國民所得分配に於けるソヴェト財政制度の役割」である。

デイヤチェンコの論文の一節に「財政に關する科學は、貨幣資金そのものを研究するのではなく、貨幣資金の形成・分配・利用を媒介する社會的關係を研究するのである。資金の大きさや構成ではなく、貨幣資金の形成・分配・利用を媒介する經濟的關係が、いろいろ